

ウェブ調査による小学生の放課後生活空間の測定

生駒 忍¹・蓮見元子¹・北原靖子¹・川嶋健太郎²・佐藤哲康^{#1}
 (¹川村学園女子大学・²東海学院大学)

放課後は、子どもが連日、自由に多くの経験を積むことのできる機会であり、発達やその支援を考える上で重要な場である。一方で、その過ごし方を定量的にとらえるために、児童に直接に評定を求めることは容易ではない。そこで、生駒他(2014)は、児童保護者評定用の放課後生活空間尺度の構成を試みた。分析の結果、「仲間遊び」「体を動かす」「自分の時間」「室内・家族」の4次元からなる構造が見いだされた。

本研究では、この尺度をウェブ調査に適用し、その一般性を検証する。各因子の内的一貫性のほか、2回の調査を行い、安定性の観点からも分析を行う。

方法

調査対象者 国内在住の小学生の保護者 220 名 (男性 132 名・女性 88 名) が、2 回の調査に回答した。

調査時期 1 回目が 2014 年 4 月、2 回目が同年 5 月であった。

調査項目 児童がこの 1 か月、平日の放課後にしていることについて、生駒他(2014)と同一の 32 項目について尋ねた。回答方法は、週あたりの頻度を、「全然ない」から「いつもある」までの 5 件法で選択する形とした。

手続き 全てのデータが、ウェブ調査会社を通し、ブラウザ上からの回答入力によって収集された。

結果と考察

各調査について、生駒他(2014)による 4 因子それぞれの内的一貫性を検証するため、 α 係数、および ω_t (MacDonald, 1999)を求めたところ、表 1 のようになった。項目数の少ない因子でやや低くなるものの、おおむね一貫性が認められたといえる。

表 1 各因子の調査時期ごとの α および ω_t

	1 回目				2 回目			
	仲間遊び	体を動かす	自分の時間	室内・家族	仲間遊び	体を動かす	自分の時間	室内・家族
α	.90	.86	.70	.66	.87	.90	.71	.75
ω_t	.90	.87	.70	.68	.88	.90	.72	.77

再検査信頼性の観点から、2 回の間での相関係数を算出したところ、表 2 のようになった。いずれも十分に高く、一定の安定性があることが示された。また、調査得点について分散分析を行ったところ、2 次の交互作用が有意傾向であり、下位検定の結果、「自分の時間」が 2 回目調査で増えたことが認められた。

表 2 各因子の調査間の相関係数

	仲間遊び	体を動かす	自分の時間	室内・家族
r	.71	.78	.70	.61

引用文献

生駒 忍・蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・佐藤哲康 (2014). 放課後生活空間尺度 (児童保護者評定用) の作成 (1) 一因子構造の検討— 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 1061.

McDonald, R. P. (1999). *Test theory: a unified treatment*. Hillsdale: Erlbaum.